

2020年 11月 27日 (金)

みらいとびら 未来への扉



高等特別支援学校 支援部 第138号

多様な発達段階

現場実習から1、2年生が学校へ帰って来て、にぎやかな様子です。2週間それぞれの実習先でがんばってきたのでしよう、晴れやかな笑顔が見られます。

「先生も昔は担任していたから、みんなの実習先もほとんど行ったことはありますよ。」

と言うと、「え〜!」と言いながら楽しそうに実習の話もしてくれれます。

その顔を見ながら、ずいぶん以前のクラスの生徒が実習後にボソッと話してくれたことを思い出しました。

「ああ、また学校が始まるう。実習先の方がよかったのに。」

「ええ? そうなの? そう言われるとちょっと寂しいけど、……まあ、働くのが好きってことはいい事やねえ。」

「それもあるんですけど。……周りが大人の人たちの方が落ち着いていて好きなんです。」

学校生活も楽しそうにしっかり送っていた生徒なので、そんな風に考えていたなんて全然知りませんでした。話を聞くと、周りの子どもっぽい子のガチャガチャした様子が少し苦手なんだそう。

「そうなんや。いろんな子と上手に付き合っているから、普段そんな風を感じているなんて思わなかったな。」

「学校だから、いろんな生徒がいますよね。」

そういう意味では、本校はいろいろな発達段階の生徒がいます。イマドキよく聞く言葉の“多様性”に満ちています。自分を中心に考えたとしても、そこから離れた発達段階の友達の多様性を否定せず認められる、すばらしいことですよね。ちょっとした違いを感じながらも、先生にボソッとグチをこぼすくらいで過ごしている、そんな大人の振舞いができる生徒はきっと現在の本校にも多いのでしょう。

確かに生徒達は同じ年齢で同じ時を生きていますが、心の発達はまだまちまちです。年齢では思春期でも、まだ子ども時代の真っ只中の生徒もいます。そして、子ども時代の生徒の中でも、それをおおらかに全面に出してくる生徒もいれば、周囲の大人びた生徒の様子を見て「こっちの方がいいのでは?」と思って無理をして寄せている生徒もいます。

どれが正しいという事ではないのですが。

“思春期”はよくアオムシがチョウチョに羽化する話に例えられますが、羽化に失敗して死んでしまう虫もいる、それほど激しい変化です。子どもは一度「いいものはいい、悪いものは悪い」といった非常にシンプルで純粋な価値基準をもった完璧な子どもに成長します。そしてそれを一旦壊しながら作り直して大人になっていくそうです。ナルホド、思春期のもろさと不安定さとイライラした様子はきっとここから来るものでしょう。保護者の方々もご自身の若かりし頃を思い出してみれば、思い当たるのではないのでしょうか。

しかし、年齢と共にみんないっせいに思春期になる訳ではありません。ああ、うちの子まだ子どもやわ〜、思春期遅れて来るわあ、と客観的に感じられる保護者の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この感覚はとても大事で、次のお話も実年齢ではなく、実像で見ただけだったらと思います。

講談社から出版されている臨床心理士の前川あさ美さんの「発達障害の子どもと親の心が軽くなる本」のコラムを一部紹介します。コラムでは“小学校低学年まで”という欄でそのまま載せていますが、もうちょっと幅を持って見ていただけたらと思います。



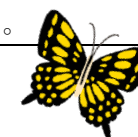
コラム

発達段階によって異なる子育てのコツ

同じ関わりが逆効果になることもあるのです。



小学校低学年まで	思春期以降
成功体験を増やせるような場をつくろう。	失敗体験も与え、失敗することはいけないことではないことを伝えよう。
ひとりでできることを増やせるように指導しよう。	助けが必要な時に「助けて」と言えるように指導しよう。
「すごい」「えらかった」「よくできた」などわかりやすい言葉でほめよう。	「ありがとう」「ご苦労様」「助かった」など感謝とねぎらいの言葉で元気づけよう。
他者に対して安心感をもつ力を育てよう。	他者との関係の中で、自分を守る力を育てよう。
「違い」を補う力を育てよう。	「違い」を理解し、それを生かす力を育てよう。



夏休み明けの136号変化する支援で、袖のボタンを締める時、実際に留める支援をするか?情緒的に寄り添いながら声を掛ける支援をするか?というお話をさせていただきました。

子どもへの関わりは子どもの成長とともに刻々と変化していきます。なんとなく小学校の時に言われた“成功体験”という言葉から離れられず失敗させないようにしていました、なんていう方はいらっしゃいませんか?

次号もこの続きをちょっとお話させていただきます。